

殉

元

司

馬

遠

郎





# 殉 死

司馬遼太郎

文藝春秋刊

# 死 殉

昭和四十二年十一月五日 第一刷

定価 三九〇円

著者 司馬遼太郎しりょうたろう

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三  
電話東京(265)一二二(代表)

万一乱丁・落丁のものはお取替えいたします

印刷・凸版印刷株式会社 製本・中島製本

© 1967 RYOTARO SHIBA

Printed in Japan

目次

I 要 塞 五

II 腹を切ること 二五

装  
幀  
三  
井  
永  
一

殉

死



# I 要 塞



麻布に、日ヶ窪ひくぼという町名がある。窪地になっている。都電材木町でおりてこのあたりまで歩くと、まわりの三方が高く、このあたりだけが大きく窪み、陽が射しにくい地形であることがわかる。いまま樹木が多いが、江戸のころはとくに樹木が鬱然うつぜんと地をおおい、晴れた日でも地面が黒く湿っていた。そういうところから、日ヶ窪といういかにも叙景的な地名ができたのであろう。

港区麻布北日ヶ窪町の低湿地には、江戸のころ、長州毛利家の支藩「長府毛利家」の上屋敷があった。陣屋は長州長府（山口県下関市）にあり、お高は五万石である。

大名屋敷としては、駿河台あたりの高燥地に屋敷をもつのはちがいがいい、ずいぶん居住条件がよくなかったであろう。江戸切絵図をみると、まわりには小笠原近江守、内田主殿頭、御書院番組屋敷などがあるが、この長府毛利家の藩邸がとくに低く、すりばちの底のようなどころにある。

いまの地理関係からいえば西に崖があり、その上に教育テレビの社屋があり、長府毛利家の藩邸はその崖下の蔭に入りこんでいる。この位置ではわずかに午前中、東からの陽ざしを受けるだけであろう。その場所はいまは小公園になっており、公園の中に、明治の軍人である乃木希典（まれすけ）がここ（藩邸お長屋）にうまれた、という旨の小さな碑が立っている。通りかかりにそれを見つけた筆者には、その碑のある風景がひどく陰鬱なようにおもえた。乃木希典という、生涯洞窟のなかで灯をともしていたような、そういう数奇なおいの人物のうまれそうなどころであるようにおもえた。

話がとぶが、この場所に、——たしか碑こそ立っていないが——ちょうどこの場所で、この軍人よりも百五十年ばかり以前、元禄十六年、いわゆる赤穂浪士のうち、武林唯七、間新六、岡島八十右衛門ら十人が死を賜わっている。

話がさらにとびとびになるが、いわゆる赤穂浪士というのは討入りのあと、幕命によっ

て、その身柄を四家にあずけられた。細川家、久松家、水野家、そしてこの長府毛利家である。細川家などは忠義義胆の士としてかれらを篤く礼遇し、その礼遇ぶりは江戸中がほめそやすほどの美談になり、そのことは講釈だ、ねのなかでもっともよろこばれるくだりの一つになっている。が、長府毛利家が最も冷遇した。

長府毛利家は武林唯七ら十人を藩邸の長屋に押しこめ、そのうえ、長屋の往来に面した窓に板をうちつけ、窓をつぶし、文字どおり罪人のあつかいをした。この冷遇が江戸中の評判になり、町人たちの非難をあび、のちややその待遇をあらためた。それもこれもべつに底意があつてのことではなく、この藩が幕府の威権をおそれ、幕命を忠実に解釈してのことにすぎず、あとになってその監禁の度あいをゆるめたのも、幕府が存外この浪士たちに好意をもっているということを知ったからにすぎない。

要するに乃木希典がうまれて十歳まで育つたお長屋に、武林唯七らが起居していたのである。希典はこの死士たちの最後の日常などを、藩邸の伝承としてきかされつつ育ったにちがいない。武林唯七の詩も読まれたであろう。唯七は帰化人の孫である。その祖父は中国杭州府武林の人で、秀吉の朝鮮ノ役で捕虜になり、日本に移住した。その子は浅野家の医官になり、唯七を生む。唯七は元禄のころの下級武士としてはめずらしく詩に長じた。

その韻律が日本人離れしたほどに自然だったのは家伝として中国音を知っていたからにちがいない。

### 三十年来一夢ノ中

生ヲ捨テ義ヲ取ル幾人カ同ジキ

家郷病ニ臥シテ双親アリ

膝下歡ヲ奉ジテ恨ムラクハ終ラザルコトヲ

と、これは武林唯七の辞世の詩である。病床にいる両親に先立たねばならぬ哀しみを、「恨むらくは」とのべている。唯七は他の九人の同志とともにこの藩邸の広庭で切腹した。切腹にあたって、話がある。元禄のころの長府毛利家は士風がよほどおとろえていたのか、江戸詰めで剣をさせる者がすくなく、浪士の切腹にあたってそれを介錯——首を落す——ことができる者はわずか五人しかいなかった。唯七は切腹の座につき、長府毛利家の家士榊正右衛門の介錯をうけた。榊は唯七の背後にまわり、唯七が腹に短刀を突き入れるや、あわただしく太刀をふりおろした。しかし太刀は唯七の頭蓋の下辺に激しくあたった

のみで刃が跳ねかえり、落せなかった。唯七は前へ倒れ、しかし起きあがり、血みどろのまま姿勢を正し、「お静かに」と、櫛に注意した。二度目の太刀で唯七の首が落ちた。

そういうのはなし——唯七の詩や、その劇的な行動と最期を、唯七が起居したその長屋とおなじ長屋にうまれ育った乃木希典はきいていたにちがいない。子供ごろにその切腹の光景の酷さを極彩色に想像しつつ戦慄したかもしれないし、同時にこの詩人としての感受性をもっていた少年は、そういう最期を人としてもっとも美しいものとして思ったにちがいない。さらに連想はとぶが、乃木希典は軍事技術者としてほとんど無能にちかかったとはいえ、詩人としては第一級の才能にめぐまれていた。その中国音の韻律のうつくしさと正しさは、「古来、日本人としてはまれではないか」と、中国人でさえほめている。そのことも武林唯七とつながりがある、といえはこれはどうであろう。こじつけに過ぎるだろうか。

筆者はある年の夏の日、右の教育テレビの崖下を通過し、同行している友人のN氏に教えられ、陸軍大将伯爵乃木希典という明治の軍人のうまれた土地がそこであることを知り、この將軍についてわずかな感慨をもった。

じつはわずかでしかない。

筆者はこの大戦の戦後に成人した世代ではなく、大戦の末期に兵隊にとられた世代に属している。当然ながら少年のころ、乃木大将と露将ステッセルが水師營において会見した、その情景をうたった小学唱歌をうたわされ、その唱歌をきけば、いまも少年のころの澄明な、そうとしか言いようのない感傷がよみがえってくる。「尋常小学国語読本」巻十の第十五章、題は「水師營の会見」である。

一、旅順開城約成りて 敵の將軍ステッセル

乃木大将と会見の 所はいづこ水師營

二、庭に一本櫟の木 彈丸あとも著じるく

崩れ残れる民屋に 今ぞ相見る二將軍

三、……………

四、昨日の敵は今日の友 語る言葉も打ちとけて

我はたたへつ彼の防備 かれはたたへつ我が武勇

が、この唱歌に出てくる筆者の乃木將軍への関心は、少年のころの感傷以上には成長し

なかった。筆者はいわゆる乃木ファンではない。

しかしながら大正期の文士がひどく毛嫌いしたような、あのような積極的な嫌悪もない。ただこのひとが自分の伯父かなにかであれば、閉口してその家には敬遠したにちがいない。もし、無人島にこのひとと二人きりで流されるとすれば——いや、どうもこの想像は趣味がよくない。

関心が薄かったとはいえ、ただ筆者が軍隊にとられ、満州にゆき、旅順の戦跡のそばを通ったとき、「爾<sup>に</sup>靈<sup>れい</sup>山<sup>ざん</sup>（二〇三高地）には砂礫<sup>されき</sup>にまじっていまも無数の白骨の破片がおちている」とか、雨がふれば人のあぶらが浮かんでは流れる、といったような、いわば観光案内ふうの話をきかされ、そのとき、子供のころから持ちつづけてきた多少の疑問をあらためて感じた。なぜ、これだけの大要塞の攻撃にこのひとのような無能な軍人をさしむけたのか、ということである。むろん、これは——この疑問は乃木希典そのひとの問題とはなんのかかわりもない——この乃木希典もまた、その意味では犠牲者なのだが。

以下、筆者はこの書きものを、小説として書くのではなく小説以前の、いわば自分自身の思考をたしかめてみるといったふうの、そういうつもりで書く。つまり前記の例でいえば武林唯七の切腹の場についての想像が、少年の乃木希典の心にどういう刻まれたをし

たかということを書者において深く考えもせず、筆者自身の思考材料として書いた。そういうふう以下のことどもを書く。筆者自身のための覚えがきとして、受けとってもらえ  
ばありがたい。

## 二

乃木希典の年譜のおもしろさは、明治四年、二十三歳でいきなり陸軍少佐に任ぜられて  
いることである。

それ以前の兵歴はさほどではない。幕末、長州藩が支藩をふくめて幕府と決戦態勢をと  
ったとき、希典も十八歳の一カ年だけ藩兵の一人として豊前（大分県）に出戦したが、その  
間負傷し、負傷後藩にもどって明倫館文学寮に入った。このころ希典はすでに自分の詩人  
的体質に気づいていたため、武人より詩文の道を志したかったらしい。右、幕末における  
兵歴はわずか半年である。

戊辰の騒乱がおわり、薩長が維新政府を樹立し、いわゆる「天下」をとった。このと  
き希典は国もとの藩校で読書掛をしていたが、従兄の御堀耕助（旧名太田市之進 長州報国